

第28回 日本死の臨床研究会 関東甲信越支部 栃木大会

プログラム
講演要旨集

い0
の歳
ちから
に向百
きき歳
合超
うえ、

オンライン同時配信

日時：令和3年6月6日（日）10：00から17：00
会場：済生会宇都宮病院 南館2階 みやのわホール
大会長：高橋 昭彦（ひばりクリニック／うりずん）



主催：第28回日本死の臨床研究会 関東甲信越支部 栃木大会事務局
共催：公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

ご挨拶

このたび、栃木県で第28回 日本死の臨床研究会関東甲信越支部 栃木大会（共催：公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団）を開催させていただくことになりました。コロナ禍の中、実行委員会は、すべてオンラインで行う事態となりましたが、多くの皆様のご尽力により、本大会を迎えることができましたこと、心より感謝申し上げます。

今回のテーマは、「0歳から百歳を超えて、いのちに向き合う」です。栃木では、在宅ケアネットワーク栃木や、在宅緩和ケアとちぎなど、在宅関係の市民活動が盛んで、多職種の顔の見える連携も育まれています。また、病院から地域への移行についてもさまざまなやり取りが行われてきました。地域での暮らしは、医療だけで成り立つものではありません。会話をする、好きなことをする、食べる、出す、お風呂に入る、出かけるなど、暮らしに寄り添うことで、その人のいのちは輝きます。この大会では、子どもから高齢者までのいのちに向き合い、その人の暮らしに寄り添う「ホスピスマインド」を学びます。

午前中の講演1は、小児の在宅医療で出会った人工呼吸器などの医療的ケアが必要な子どもたち（医療的ケア児）について私がお話し、講演2では、副島賢和さんから、院内学級の子どもの声についてお話を伺います。午後のセッションは、自宅で亡くなった小児がんの子どもの在宅チームが集い、矢吹拓さん、武井大さんの司会進行で、振り返りのデスカンファレンスをライブで行います（個人が特定されないよう、内容が損なわれない程度に改変）。最後のシンポジウムでは、栃木県内で地域活動を行う若者たちが集います。小林敏志さんは、在宅所で認知症高齢者の「その人らしさ」を追求されています。石網秀行さんは、地域ド密着のデイサービスを拠点に垣根のない地域活動をされています。濱野将行さんは、地域で孤立する高齢者の実態を知り、高齢者も若者も出入りする居場所をつくっておられます。地域で輝く若者たちの挑戦の先には、共生社会が垣間見えます。

今回は、感染予防のためオンライン配信を主とし、会場参加の人数を当初の予定からさらに減らしたため、会場参加の希望が叶わなかった方がおられました。また、Peatixでの申し込みを原則としたこと、会場での食事はできないことなど、参加者の皆様には、ご迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げます。

様々な困難に向き合いながら、準備段階では多くの方々と出会い、助けられ支えられてきました。この準備のプロセス自体が、ホスピスマインドに満ち溢れていました。各地からオンラインでご参加いただいた皆さん、会場に足を運んでいただいた皆さん、講師の皆さん、ご尽力いただいた関係者・実行委員等の皆さんに言葉に尽くせない感謝を申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

2021年6月吉日

第28回 日本死の臨床研究会関東甲信越支部 栃木大会
大会長 高橋 昭彦（ひばりクリニック/認定特定非営利活動法人うりずん）

ご参加のみなさまへ

- 研究会の写真撮影、録画・録音等はお控えいただき個人でお楽しみください。

来場のみなさまへ

- 会場内、施設内では参加証を携帯し、再入場の際には係員に提示してください。
- 携帯電話は電源をお切りになるか、マナーモードに切り替えてください。
- 地震など災害時には、会場スタッフの避難誘導に従って行動してください。
- 感染予防のため、マスクの着用、手指消毒、指定の場所での飲食をお守りください。密を避けるために指定のお座席でご参加ください。
- その他、参加前にお送りした『新型コロナウイルス感染対策への対応について』を再度ご一読いただき、引き続きご協力をお願いいたします。

会場および会場内のご案内

来場時は、スタッフ証を付けた係の者がお名前を確認させていただきます。

再入場時には、参加証をご提示ください。

ご協力をお願いします。



- 施設入り口は施錠されており、開場時間に合わせてスタッフがお待ちしておりますが、お昼休憩時の移動につきましては、休憩時間前に会場内のご案内させていただきます。

プログラム (敬称略)

総合司会 岸田さな江 (獨協医科大学病院)

10:00 開会挨拶 大会長 高橋昭彦

医療を必要とする子どもたちに向き合う

10:10~11:00 講演1.『医療的ケア児と家族の当たり前の暮らしとは』
ひばりクリニック院長・認定特定非営利活動法人うりずん理事長
高橋昭彦

11:10~12:00 講演2.『心の声が言葉になる
—院内学級の子どもたちが教えてくれたこと—』
昭和大学大学院保健医療学研究科 准教授
副島賢和

12:00~13:20 ~~~~~ お昼休憩 ~~~~~
(13:00~13:15 関東甲信越支部総会 会員の方はご参加ください)

13:20~14:45 カンファレンス チームで取り組む小児在宅緩和ケア
演者： 小児がんの子どもに関わった在宅チーム
・訪問看護ステーション看護師
・調剤薬局薬剤師
・在宅医
司会： 国立病院機構栃木医療センター 内科医長 矢吹 拓
宇都宮協立診療所 所長代行 武井 大
記録補助：国立病院機構栃木医療センター 伊豆倉遥

実践で地域の人々に向き合う

15:00~16:40 シンポジウム 地域で輝く若者たちの挑戦

講演1.『約束を忘れた僕を慰めてくれるおじいさんは、約束を覚えていない』
宅老所はいこんちょ代表 小林敏志

講演2.『地域ド密着!?~多様な人々が関わりすぎるデイサービス物語~』
特定非営利活動法人福聚会運営統括責任者・就労継続支援B型「わたの実」管理者
石綱秀行

講演3.『作業療法の視点を生かしたまちづくり~社会的処方の実践事例~』
一般社団法人えんがお代表理事 濱野将行
司会：高橋昭彦 (ひばりクリニック/うりずん)
小田戸真弓 (まるごとケアの家あいさん家)

16:50 閉会挨拶 実行委員長 岸田さな江

講演 1

医療的ケア児と家族の当たり前の暮らしとは

ひばりクリニック 院長

認定特定非営利活動法人うりずん 理事長 高橋昭彦

医療の進歩により、人工呼吸器、気管切開、経管栄養、在宅酸素などが必要な医療的ケア児が増えています。しかし、医療的ケア児と家族を支える制度は十分でなく、家族に多大な負担を強いてきました。3時間以上続けて寝たことがない親、働きたいのに働けない親。いつも我慢しているきょうだいも気がかりです。地域で暮らす20歳未満の医療的ケア児は2019年には2万人を超え、年々増加しています。

退院して家に帰ると、24時間ケアが必要になります。痰がつまるといつでも吸引します。おなかやすくすると管から栄養を注入します。人工呼吸器がついていると片時も目を離すことはできません。外出には、“家出するほどの荷物”を車いすに搭載します。その車いすごと乗れる車がないと遠くへはいけません。このお出かけの用意が大変なことから、なかなか外出ができません。このことは、ステイホームの今なら理解しやすいかもしれませんが、医療的ケア児を預かる保育園はほとんどないため、親はどちらかが仕事を続けることが難しくなります。次の子どもが生まれるときには、それなりの用意をして臨む必要があります。学校に行くときは、親が送り迎えするのは当たり前で、信じられないことに、親が学校に待機を求められることもあるのです。18歳で学校を卒業すると厳しい現実が待っています。大人のデイサービスである生活介護は、重度の医療的ケア児は体制がとれないためなかなか受けられません。さらに、子どもは大きくなり、親も年を重ねて、介護ができなくなる時期がいつかはやって来ます。しかし、親なき後の問題は全く解決していないのです。すべての課題の根幹には、「その地域で親以外にその子どもを看られる大人がいない」という問題点があります。これまで、「子どもを親がみるのは当然」で済ませられてきた、医療的ケア児の暮らし。でも、親は普通の育児の何倍もの時間と労力を注がねばなりません。私が訪問する子どもの家にはきょうだいがあります。きょうだいがいい子だと気になります。無理していないか、我慢していないかと思うのです。

できることをやろうと思い、2008年に「うりずん」を立ちあげました。医療的ケア児を、安全・安心に預かるだけでなく、ほぼマンツーマンのケアで、子どもも安楽に（楽しく）過ごしてもらいます。うりずんの玄関で家族に行ってらっしゃいと手を振り、子どもたちはうりずんでお友達とひと時を過ごします。春はお花を見に行きます。夏はプール。秋は落ち葉。冬は雪遊び。日常の日をケの日といいいます。時には、スペシャルなハレの日もあります。祭り、動物園ツアー、りんご狩り、クリスマス会などで思いっきりはじけます。医療的ケア児には、同じ年の子なら経験しているだろうことを経験できない子どもが多いのですが、経験を積み重ねていくと、経験値は0から1になります。そして、医療的ケア児が外出すると、社会が変わっていきます。今日は、医療的ケア児と家族の当たり前の暮らしについて皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

プロフィール

高橋昭彦（たかはしあきひこ）

滋賀県長浜市出身。1985年自治医科大学卒業。

2002年 ひばりクリニック開業。

2008年 医療的ケア児の日中レスパイトケア
を行ううりずん開設。

2012年 特定非営利活動法人うりずん理事長。

日本小児科学会専門医。日本プライマリ・ケア
連合学会指導医・認定医。

2016年 日本医師会第4回赤ひげ大賞受賞。



講演 2

心の声が言葉になる～院内学級の子どもたちが教えてくれたこと～

昭和大学大学院保健医療学研究科
准教授 副島賢和

○病院内学級（病弱虚弱児教育特別支援学級）について

病院に設置された特別支援学級です。病院に入院している児童の中で、本人・保護者が希望し、医師が許可した病弱・虚弱の子どもたちが通っています。長期入院で入級している子どもで、教室に来ることができない場合は、毎日（教室の子どもの状況により、時間を検討する）ベッドサイド授業を行います。

病院内学級の役割は『子どもたちの発達を保障すること』です。近くの小・中・特別支援学校から担任の先生が訪れ、病棟スタッフの方達とチームとして活動しています。

○大切にしているかかわり（副島 2020）

1. 発達を保障する（学びとあそび～日常）
2. 子どもに戻す（『今』を味わう）
3. 不安の軽減（安全・安心を感じる）
4. 感情の表出（どんな感情も大切に）
5. 感覚を発揮できる（学びを発動する）
6. 肯定的な自己イメージを育む（社会的自尊感情と基本的自尊感情）
7. 病気に向き合う力を培う（エネルギー）
8. 喪失に向き合う力
9. 援助希求（ひとりじゃないよ・ひとりでも大丈夫）
10. 自立（共に生きる力を持つ）

○こどもの権利

1988年オランダで開催された第1回病院のこどもヨーロッパ会議において合意された10箇条の「病院のこども憲章(EACH Charter)」があります。この憲章を作成した、病院のこどもヨーロッパ協会(European Association for Children in Hospital/EACH)のメンバー団体は、ヨーロッパ各国における保険法、規則、及び、ガイドラインの中にEACH憲章の原則を組み入れることを目指しています。

また、1989年に国連で採択をされた「子どもの権利条約」は、1990年に国際条約として発効され、日本は、1994年4月22日に批准し、1994年5月22日に発効しました。「子どもの権利条約」は、①生きる権利②育つ権利③守られる権利④参加する権利の4つの原則を定めています。

これらのことを受けて、日本でも、こども病院や自治体を中心に「病院のこども憲章」や「病院のこどもの権利」等を作っています。2021年昭和大学病院も「こどもの権利10箇条」を定めました。

「子どもが子どもでいられることを保障すること」について、病気のある子どもたちの教育の視点から、一緒に考えていただけると嬉しいです。

プロフィール

副島賢和（そえじままさかず）

1966年 福岡県生まれ

1989年 都留文科大学卒業

同年、東京都公立小学校教員として採用され、以後25年間、都立公立小学校学級担任として勤務。

1999年 東京都の派遣研修で、在職のまま東京学芸大学大学院にて心理学を学ぶ。

2006-13年 品川区立清水台小学校さいかち学級（昭和大学病院内）担任。

2014年4月より現職。

学校心理士スーパーバイザー。ホスピタル・クラウン。

北海道・横浜こどものホスピスプロジェクト応援アンバサダー。

TSURUMI・東京こどもホスピスアドバイザー。日本育療学会理事。

NPO法人YourSchool理事。NPO法人元気プログラム作成委員会理事。

へるす出版小児看護誌に「あかはなそえじの子どもエナジーステーション」連載中。

2009年 ドラマ『赤鼻のセンセイ』（日本テレビ）のモチーフとなる。

2011年 『プロフェッショナル仕事の流儀』（NHK総合）に出演。

2020年 YouTube「あかはなそえじ・風のたより」<https://www.youtube.com/watch?v=ndPOLLrhg8k>



医療を必要とする子どもたちに向き合う

チームで取り組む小児在宅緩和ケア

～デスクカンファレンスをライブで行います～

演者：小児がんの子どもに関わった在宅チーム

- 訪問看護ステーション看護師
- 調剤薬局薬剤師
- 在宅医

青空 つばさ 君 高校1年生

(個人が特定されないよう、内容が損なわれない程度に改変しています)

司 会： 矢吹 拓 さん (栃木医療センター)

武井 大 さん (宇都宮協立診療所)

記録補助： 伊豆倉 遥 さん (栃木医療センター)



カンファレンス チームで取り組む小児在宅緩和ケア

国立病院機構 栃木医療センター
内科医長 矢吹 拓

超高齢者社会を迎えた我が国の医療介護の現場では、看取りを経験する機会は確実に増えてきています。人生の最期を迎えるお一人お一人とご一緒し、ケアに携わることができるのは有り難いことですし、ある種のやりがいを感じることもありますが、一方で看取りを通して悩みを抱えたり、不全感を感じる職種がいるのも現状ではないでしょうか。私自身も多くの患者さんの看取りを経験する中で、そういった悩みや時に葛藤を感じながら、思いを共有したり、振り返ったりする機会が少ないと感じていました。

「デスカンファレンス」は看取り経験を多職種で振り返るカンファレンスです。宇都宮協立診療所と栃木医療センターでは、2011年頃から看取った患者さんを振り返る取組をしています。具体的には患者さんに関わった院内外の多職種で集まり、「Jonsenの臨床倫理4分割法」という枠組みを用いてカンファレンスを行っています。看取りに関わった人達が、その関わりや体験を振り返りながら、共有された情報を、司会者が①医学的適応、②患者の意向、③QOL、④周囲の状況に分けて記載し、それぞれの気付きや思いを話し合い、それぞれの思いを語っていきます。カンファレンスを通して、多くの参加者の悩みや葛藤が表出されたり、しばしば新たな気付きが生まれたりします。特に結論を求めたりはしませんが、これまでのカンファレンスを通して、多くを学び成長させて頂きました。

こういった振り返りが、医療者自身のグリーフケアに繋がっていると感じることも多くあります。「臨床倫理の4分割法」の様な多角的な側面から看取りを振り返ることができる枠組みを用いたカンファレンスは、是非広く行われて欲しい取り組みだと感じています。当日は高橋先生を始めとした在宅チームの皆様と、一緒に振り返れることを楽しみにしています。

プロフィール

矢吹 拓（やぶき たく）

2004年 群馬大学医学部卒業
2004-2006年 前橋赤十字病院初期臨床研修医
2006-2011年 独立行政法人国立病院機構
東京医療センター総合内科後期研修医
2011年4月より現職

栃木に来て11年が経ちました。

多くの仲間にも恵まれ、病院と診療所を行き来しながら総合診療医として日々働けることを感謝しています。



カンファレンス チームで取り組む小児在宅緩和ケア

宇都宮協立診療所
所長代行 武井 大

デスカンファレンスの始め方

今回のデスカンファレンスに参加されて、自分たちでもやってみたいと思う方への参考までに私たちのやり方を共有します。

1) 基本ルール

①**No blame culture** ; 相手の意見や対応を非難しない。建設的な振り返りを行ないます。

②全ての参加者が発言する；大人数の際は難しいこともあるのですが、実際に患者さんに関わった方だけでなく、カンファレンスに参加している全ての人が、自分が専門職として関わったらどうだろうか、自分が患者さんだったらどうだろうか、自分が家族だったらどうだろうか、と様々な視点から質問や意見を出すことで対話が深まります。

③結論を求めない；亡くなられた方の振り返りなので「今後こうしましょう」というような1つの結論を出すことはしません。話し合いの内容が多岐にわたって収束しないまま終わりにすることも良いことにしています。その中で、参加者それぞれが何かを受け止めて帰ります。もやもやした気持ち（倫理的ジレンマなど）は残りつづけます。ですが、軽くなると思います。

2) 方法

「Jonsenの臨床倫理4分割法」の枠組みを参考にして、さらに「歴史」を加えて5分割にしてホワイトボードにまとめていきます。この「見える化」が大切です。4分割法で無くてもよいのでぜひホワイトボードなどを用いて「見える化」してください。「歴史」は患者さんやそのパートナー、家族の生い立ちや職業歴などについて関係者が知っていることを書き出していつています。

私自身が、この振り返りのカンファレンスを行なって来なければ、患者さんとお別れを通して感じた命の重みに押しつぶされて医師を続けられなかったと感じています。ぜひ、皆さんも取り組んで見てください。

医学的適応

病名、認知機能など。ここはあまり掘り下げません。

意向

患者さんの意向、家族の意向など

歴史

生まれたところ、生育歴、職業歴、結婚やパートナーとのなれそめ、家族の歴史、などなど。病歴も。

QOL

QOLについて、改善したこと、悪化させたこと。ちょっとした思い出など。グリーフケアにつながることなど。

周囲の状況

家族図。関係者のこと。その他背景情報(社会経済的背景も)。

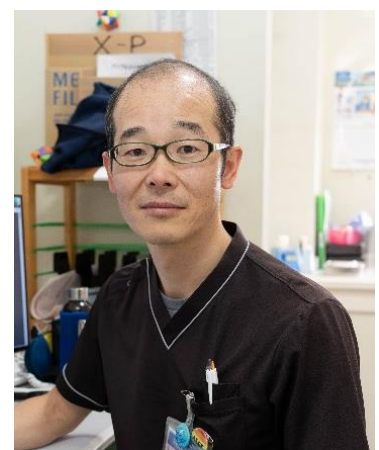
プロフィール

武井 大 (たけい だい)

2001年 自治医科大学医学部を卒業し東京都でへき地医療等に従事。

2010年4月 宇都宮協立診療所に勤務。現在に至る。

診療所では外来、在宅、入院診療を行ない、栃木医療センター内科と協力して家庭医療専門医、総合診療専門医の育成にも取り組んでいます。



実践で地域の人々に向き合う

シンポジウム 地域で輝く若者たちの挑戦

司会：高橋昭彦（ひばりクリニック／うりずん）

【このシンポジウムの目指すところ】

年を重ねていくと、できることが減ってきます。同居者がいなくなり一人暮らしになることもあるでしょう。認知症になる人も増えています。それでも、この地域で暮らしたいと願うとき、必要なことは何でしょうか。食べる、出す、お風呂、などいのちに直結するケアは必要ですが、おいしいものを食べたい、座って便をしたい、肩までお湯につかりたい、と希望するのはわがままではありません。人と話す、笑う、季節をめぐる、と言った豊かな時間も欲しいし、人生の最期を過ごすための訪問看護や在宅医療も必要です。

しかし、人は一方的にケアを受け続けるだけの存在ではないはずで、作った野菜を誰かに食べてもらおう、若者に昔取った杵柄を伝えるなど、自分にも役割があると嬉しいです。動くことができなくなっても、その人の居場所があれば、その「存在」こそが、生きている証です。栃木には地域の人たちに向き合うすばらしい若者がおられます。

認知症高齢者の宅老所を開く小林敏志さんは30代。オムツを外し、個浴の入浴、口から食べるケアを実践されています。石網秀行さんは40代。地域ド密着のデイサービスを拠点に、ケアを受ける側、する側の垣根を取り払い、人々の笑顔が輝くケアを実践されています。濱野将行さんは20代！。地域で1週間誰とも話をしたことがないという高齢者を見て立ち上がり、空き家を活用し居場所をつくり、2階を若者の学習室にして交流を進めます。

私たちが、年を重ねていくとき、近くにこういう若者がいたら、こんな場所があれば、どんなに心強いことでしょうか。地域で輝く若者たちの挑戦の先には、もう共生社会が垣間見えています。さあ、皆さんと一緒に考えましょう。学びましょう。

司会：小田戸真弓（まるごとケアの家あいさん家）

小田戸真弓です。那須烏山市にある看護多機能小規模施設で働いています。幼少の頃から介護が身近にあり、幸せに生き抜くにはと言う追及から、介護の仕事を選んで今日に至ります。介護される側の家族の視点から、あの時あんな言葉をかけてもらいたかった。あんな事をしてもらいたかった。と過去の経験から、一個人が幸せに生きるには？という事を模索しながら介護の仕事に携わらせてもらっています。一人一人、生き方、幸せの感じ方、求める物が違う中、一人一人に向き合い、人と人として向き合える介護の仕事が私はとても大好きです。喜怒哀楽に寄り添い、家族に近い関係性のある看護多機能施設。小規模であるからこそしっかり向き合える環境があります。利用者様に第二の家族であるように頑張っています。



約束を忘れた僕を慰めてくれるおじいさんは、約束を覚えていない

宅老所 はいこんちよ
代表 小林敏志

初めまして。鹿沼市で高齢者の小規模デイサービスを運営している小林です。

介護職になって18年目になります。高齢者介護の現場でお年寄りとお出逢い「いのち」や「今を生きる」ことについてずっと考えてきました。

僕は、介護が必要になったお年寄りが最期までその人らしい生活を続けて貰えるように支えたいと思い、この仕事をしてきました。ところが介護しているうちに、支えているつもの僕の方が、介護が必要なお年寄りから支えられている感覚に陥るようになりました。

なぜ介護が必要なお年寄りから、僕ら介護する側の介護職がケアされているのか。笑顔が嬉しいとか元気になって嬉しい気持ちもありますが、それとは別の一方通行ではない「頼り頼られる感覚」が僕を支えています。うーん。うまく言語化できずにすみません。まだまだわからないことだらけで、おそらく介護人生をかけて研究していく壮大なテーマではありますが、現時点でわかってきたことをお年寄りとのエピソードを通してお伝えします。

今回のタイトルは、ちょうど講演依頼が来た時期に、僕が認知症のおじいさんの家に訪問する時間を忘れてしまい、遅刻しておじいさんに謝った時の様子をタイトルにしました。おじいさんは約束を忘れてしまった僕を許してくれました。おじいさんは約束を覚えていなかったのだけど。約束を覚えていないおじいさんと約束を忘れてしまった僕。今を生きるには覚える事と同じくらい忘れることも大事なかもしれない。そんな価値観に出逢ったのは、介護のおかげです。

プロフィール

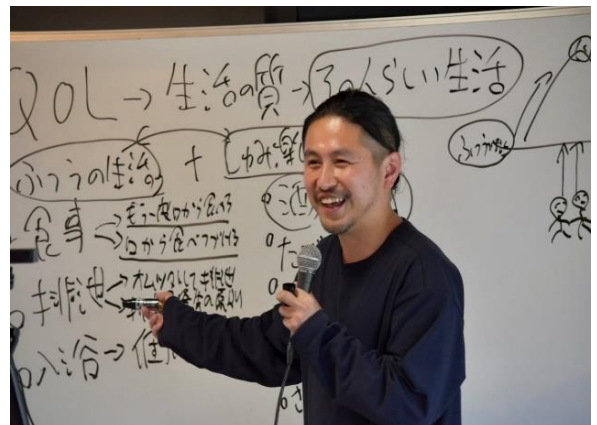
小林敏志（こばやしさとし）

1983年長野県生まれ。介護福祉士。

宇都宮短期大学人間福祉学部介護福祉専攻卒業後、長野県の老人保健福祉施設と特別養護老人福祉施設で約10年間介護職として勤務。

介護リーダーとして生活リハビリを実践。

オムツ外し、個浴入浴、口から食べる食事ケア、楽しみや生きがいを最期まで続けていく在宅介護を実践する為に、平成26年に鹿沼市で「宅老所はいこんちよ」を開設。



シンポジウム 地域で輝く若者たちの挑戦

地域ド密着!?～多様な人々が関わりすぎるデイサービス物語～

特定非営利活動法人福聚会 運営統括責任者
就労継続支援 B 型「わたの実」 管理者
石綱秀行

年を重ねて介護が必要になっても、障害を抱えて支援が必要であっても「役割」が人を輝かせます。

地域の中では、貧困や引きこもり、虐待、介護など、いろんな人が複数の問題を抱えて生きています。

そんな人同士が自らの意思で地域の中で自然に支えあっています。その関係性が「役割」となり地域を活性化させるのです。

何より凄いのが「人を想う関係性」はアメーバのように日々増殖していること。デイサービスなんて場所でありキッカケに過ぎないのです。

プロフィール

石綱秀行（いしづなひでゆき）

- 1998年 長野大学社会福祉学科卒業後
特別養護老人ホームに勤務
- 2001年 特定非営利活動法人福聚会
無量荘にて通所介護業務に従事
- 2003年 特定非営利活動法人福聚会事務局
- 2007年 無量荘（認知症対応型通所介護）管理者
無量荘（居宅介護支援事業所）管理者
- 2012年 和久井亭（地域密着型通所介護）管理者
- 2018年 特定非営利活動法人福聚会運営統括責任者
- 2020年 障害者就労継続支援 B 型「わたの実」管理者



宅老所・グループホーム全国ネットワーク事務局
栃木県生活支援コーディネーター養成指導者

資格：介護福祉士・介護支援専門員

作業療法の視点を生かしたまちづくり～社会的処方の実践事例～

一般社団法人 えんがお
代表理事 濱野将行

皆さんこんにちは。栃木県大田原市で「一般社団法人えんがお」という法人を運営しております、濱野将行と申します。私たちは、主に人とのつながりが希薄な高齢者が、人生の大切な締めくくりの期間が孤立して終わってしまうことの無い地域を目指しています。

そのための事業として、高齢者のお宅に訪問し、困りごとを解消しながら会話の時間を作っていく「生活支援事業」をメインに、徒歩2分圏内に6軒の空き家を借りて、地域サロン・コワーキングスペース・地域食堂・若者シェアハウス・障がい者向けグループホームなどを運営しております。そして、こういった活動に、年間延 1000 人の学生・若者が参加してくれています。

今の社会は、子供・大人・高齢者・障がい者がそれぞれ分断された社会です。でも、おじいちゃんやおばあちゃんは子供に何か教える時、物凄い生き生きしますよね。障がいを抱えた方は「誰かの役に立ちたい」という気持ちが人一倍強いです。分断するから、「苦手」が「できない」になり「できない人」になるのだと思います。苦手なことは得意な人に任せて、できることで他者に貢献し合う。そんな関係性が地域の「日常」になることを目指して、挑戦を続けています。その中でたくさんの失敗をして、学んだことや、これから目指す景色について、お話させていただきます。

プロフィール

濱野将行（はまのまさゆき）

29 歳、栃木県矢板市出身、作業療法士。

大学卒業後、高齢者施設で勤務しながら「学生と地域高齢者のつながる場作り」を仕事と両立する中で、地域の高齢者の孤立という現実と直面。

根本的な解決に届く地域の仕組みを作るため、2017 年 5 月「一般社団法人えんがお」を設立し、高齢者と若者をつなげるまちづくりに取り組む。



好きなものはビールとアウトドア。



皆さまに心からの感謝を込めて



本日は、ご参加くださりありがとうございました。コロナ禍のため、来場参加から Web 参加に変更して頂きました皆さま、ご協力に改めて感謝申し上げます。

2020年12月6日(日)夜、実行委員5名でWeb実行委員会を開始しました。本日まで10回のWeb実行委員会、大会1週間前のデスクカンファレンスWebリハーサル、初顔合わせとなった会場リハーサル、そして大会前日の会場設営と、多くの皆さまのお力をお借りして本日の開催に至りました。

その間、実行委員はもとより協力者、出演者の皆さまには、詳細な準備・打ち合わせに多くの時間をかけて頂きました。また、コロナ禍にも関わらず会場を提供して下さいました済生会宇都宮病院および関係者の皆さまには、準備段階から安全かつ充実した研究会になるようにと、貴重なご指導ご提案を頂き心から感謝しております。日本死の臨床研究会関東甲信越支部事務局、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団、下野新聞社の関係各位にお礼申し上げます。

『日本死の臨床研究会』今回のご縁を大切に、Zoom画面共有の皆さまとも来年こそは顔を合わせ、「死の臨床」を語り合えるようになりますよう心から願って、お礼のご挨拶とさせて頂きます。ありがとうございました。来年、元気でお会いしましょう。

実行委員長 岸田さな江

2020~2021年

12月6日(日)第1回実行委員会 Zoom	大会長：高橋 昭彦(ひばりクリニック)
12月16日(水)第2回実行委員会 Zoom	大会実行委員長：岸田さな江(獨協医科大学病院)
1月20日(水)第3回実行委員会 Zoom	大会副実行委員長：倉松 俊弘(薬王寺)
2月17日(水)第4回実行委員会 Zoom	大会顧問：粕田 晴之(済生会宇都宮病院)
2月24日(水)第5回実行委員会 Zoom	実行委員：羽石 洋子
4月21日(水)第6回実行委員会 Zoom	大野 凜太郎(済生会宇都宮病院)
3月17日(水)第7回実行委員会 Zoom	江波戸 和香(つくも薬局)
5月12日(水)第8回実行委員会 Zoom	横山 孝子(訪問看護ステーションあい)
5月19日(水)第9回実行委員会 Zoom	横山 則男(まるごとケアの家あいさん家)
5月26日(水)デスクカンファレンス・リハーサル Zoom	野村 亜矢(獨協医科大学病院)
5月30日(日)会場にてリハーサル	
6月2日(水)第10回実行委員会 Zoom	(敬称略・順不同)

協力

済生会宇都宮病院
済生会宇都宮病院 医療情報室・看護部・総務課
済生会宇都宮病院・感染対策委員会
伊澤 紀子 江連 澄江 佐藤 香奈(看護部)
河内 利恵子(総務課)

大会運営協力

石川 慎太郎(つばめソリューション)
加藤 裕貴 (レクスタ)
門間 大輝 (とちぎユースタポーターズネットワーク)
佐藤 英治 (うりずん)
まるごとケアの家あいさん家 受付事務

『日本死の臨床研究会』のご紹介

「日本死の臨床研究会」は、1977年12月1日に創設されました。

目的は、「死の臨床において、患者や家族に対する真の援助の道を全人的立場より研究していく」ことです。

第41回記念年次大会において「札幌宣言2016」が採択されました。

「日本死の臨床研究会は、死の臨床において、患者や家族に対する真の援助の道を、これからも継続的に研究していくことを宣言します。この宣言を基に、全人的ケアをとおし、全ての人が、人生の最期まで、希望する生き方を実現できるように、会員一同、努力することを誓います。」と決意しました。

関東甲信越支部は、日本死の臨床研究会の地方支部で、命とまっすぐ向き合う研究会です。日本死の臨床研究会同様に、法人格を持たない有志の研究会です。医療・福祉・介護の現場で命と向き合う人だけでなく、命について真剣に考える方ならどなたでも会員になっていただけます。

詳細は、日本死の臨床研究会ホームページをご覧ください。

<https://www.jard-info.org/>

研究会にご賛同いただいた皆さまのご入会を心からお待ちしております。

今後予定されている研究会のご案内

- ・第45回日本死の臨床研究会 年次大会 テーマ：「暮らしの中にある看取りへ」
完全WEB開催（福岡県） 大会長 小杉 寿文さん 梅野 理加さん
オンデマンド配信：2020年11月22日～12月26日
WEBライブ配信：2020年2月4日、5日
- ・第29回日本死の臨床研究会 関東甲信越支部大会 テーマ：「日常の死と距離感」
開催地：長野県 大会長 平方 眞さん
2022年6月5日（日） 会場：清泉女学院大学（予定）

ありがとうございました
アンケートにご協力ください



アンケート用 QR コード